【解説】

越後獅子という長唄は、同名の「地唄」と、その当時の流行歌である「浜唄」と言われる民謡とを元歌にして、アレンジしたものである。地唄の歌詞は、参考資料の欄に掲載しておいた。長唄「越後獅子」の歌詞にでてくる「おけさ節」の元歌は多数ある。北九州から日本海の廻船とともに、佐渡や新潟など各地の寄港先で、船乗り達は廓に上がって遊ぶ。そこで歌ったものが、例えば「佐渡おけさ」となり、地元の盆踊りとして定着したものも多い。

越後で生まれた「越後獅子」という大道芸は、創作者が角兵衛という人物であったする説により、「角兵衛獅子」とも呼ばれている。この獅子踊りを披露する大道芸人のグループを、人々は「角兵衛」と呼称していたのである。毎年、雪解けを待って、越後の国から、江戸へ出て来て興行をする。親方が七、八人のグループを組み、興行は、一人〳〵が別れて、門付けで芸を披露して花代を稼ぐ。それが終ると親方が投宿している所に集合し、更に皆で芸を披露して、また花代を稼ぐシステムである。

歌詞の解説に移ろう。歌詞は大道芸人の口上である。観衆を引きつける話術があり、掛詞や縁語でテンポ良く繋がってゆく。この若い旅芸人には未だ子供はおらず、恋女房とは一緒に朝晩に麻糸を紡ぐのが楽しいのかと思ったら、一人旅の楽しみを語っているようだ。「朝、夜、毎の楽しみ」とは、観衆の妄想に訴える、男女の営みのことである。男は朝立ち、夜這いか（笑）。

諸兄も新潟の花街、古町の料亭にでも行けば、芸者さんから「兄さま」と今でも呼ばれよう。好きな男は皆、「兄さま」と言う、新潟の片言（変な言い方）である。

辛苦甚句はゴロ合わせであるが、甚句とは「地の句」を語源とする七、七、七、五の四句から成る歌詞であり、歌である。

獅子と牡丹の関係は、知られた話であろうから省略する。

自身が獅子になったり、牡丹になったりするのだから忙しい。

「おけさ」とは「おけさ節」の由来となった「お桂」という名の美しい女の代名詞である。その女と懇ろになる時の松の木は、常緑で目出度いとする一般論もあるが、女房詞では松茸、即ち、男根の隠語でもある。「小松の陰」とあるので、巨根ではなかったことが分かって「プッ」と吹き出した観客も居た筈だ。それに気付かぬ観客は、まあ、それなりに芸人の口上を楽しんだことであろう。因みに、「松の葉」ではなく「松の木」は、男性の象徴である。長唄「藤娘」では、女の「藤の蔓」は男の「松の木」に、いとし（愛しい）と絡みつく。

紫竹は黒紫の竹である。盆栽的な鑑賞用植物でもあるが、竹の調度品にも使用される。素材の紫竹は葉を落とし、一定の長さに切り揃えて、しばらく室（温室）で熟成させて艶出しをする。室には小さな取入れ口があるので、そこで年頃の若い娘が居眠りをしているのだ。年頃とは、今も昔も十七才である。

令和六年六月二十五日

大中臣正比呂　記